

うとうとしながら、BGMに美しい
旋律のクラシック音楽を流す

F. SCHUBERT (1797-1828)
S.V. Rakhmaninov (1873-1943)
J. BRAHMS (1833-1897)

今回は、右脳に音楽を聴かせ、左脳を休める。来週の仕事のことや、先週の仕事を思い出してはいけない。とりえず忘れておこう。演奏する曲はスローなテンポで適度に「美しい旋律」を奏でる曲がよい。ここでは、少し長めの名曲を選んだ。音量は小さめにし、周囲の騒音と同じぐらいにする。また、聞いているような意識状態から、曲に飽きて、徐々に自然に眠れるように仕向けるのがポイント。無理をして音楽を聴こうと意識をしてはいけない。それでも、右脳は「美しい旋律」だけを追いかけていく筈だ。

休日を巧く活用できない人の中には、休日寝すぎてしまう人も多い。1度は、いつもの時間に起床する。そして、軽く食事をして、再び寝ころがって音楽を聴こう。



ここで紹介しているような音楽をかけると、何時までも寝てしまうライオン丸。平素から疲れていたようだ。

□F.シューベルト
交響曲 第9番 ハ長調 D.944
「THE Great」



有名な曲は、多くの演奏者がCDを出しているの、マニアといわれる人は、何枚も持っている。また、クラシック名曲シリーズのようなセット

物を購入すると、たいがい「未完成」と共に入っている。演奏としては、カールベーム指揮のドレスデン国立管弦楽団がお勧めだが、これはアナログ録音。ここは1つ、録音の良さでテラークを挙げてみた。クレーグランド管弦楽団でクリストフ・フォン・ド・ホナーニの指揮。演奏自体はどうってことないが、各楽器の音が鮮明で美しく、ダイナミックレンジが広いのが特徴。また、少しテンポが速く感じられキレもよく、現代調の演奏ともいえる。録音は、直接音と間接音をたった3本のマイク(ショップスMKⅡ)によって収集している。それでも、これだけ鮮明でワイドレンジの録音が出来ると驚く。

一方、クラシックは模範演奏でないと、という人にはカールベーム指揮のベルリンフィルがお勧め。端正で美しい響きを放つ。こちらはアナログ録音。

以上3枚のどれでもかまわない。

□S.V.ラフマニノフ
ピアノ協奏曲 第2番 ハ短調 op.18
ピアノ協奏曲 第4番 ト短調 op.40



2番は、暗い曲だから好きではないという人も多い。しかし、「熱くメロディック」なので、馴染みやすく、覚えやすい。先日も、アレンジされてTVドラマ「氷の華」のバックに流れていたくらいだ。ピアノは、ウラディミール・アシケナージで、第1楽章の超絶技巧的な独奏部では、力強さの中にも淡々と、細部まで正確に表現され、美しい名演奏。ベルナット・ハイティンク指揮、アムステルダム・

コンサートヘボウ管弦楽団。第3楽章は、映画音楽かのような美しい豊かな盛り上がりを見せる。

4番は、ピアノの美しい音の響きが特徴。2番とは対照的なので、時々意気消沈するかもしれないが、思い出したように、時々メロディックな部分もある。第3楽章では、オーケストラレーションが盛り上がり、ピアノも負けじと迫力を増していく。録音も優れており、ピアノ音がブリリアントで美しく結構楽しめる。

□J.ブラームス
交響曲 第1番 ハ短調 op.68
運命の女神の歌 op.89
「神々を恐れよ、人類は！」



クラウディオ・アバド指揮ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による演奏。「ブラームスは大好き？」と聞かれても、大学祝典序曲と交響曲1番のこの曲ぐらいしか知らないし、しかも、第4楽章を楽しむために、長い時間をかけてじっくり聞き手を洗脳する、その技巧的なのが嫌いだ。という人も少なくない。しかし、見方を変えると、最後に、「そ、そ、そうか、そうだったのか」と言わせられることは、素晴らしいことなのかもしれない。だから、途中で投げ出さず、リハーサルのような、これらの前楽章をじっくり聞いていて欲しい。第4楽章のホルンが高らかに鳴ったらいよいよ本番開始だ。

注)シューベルト、ラフマニノフ、ブラームスと異色の取り合わせ、さらに、テラーク、ロンドン、グラムフォンとレーベルも異なる。クラシック百選のようなパッケージには名演奏が豊富にあり、しかも割安で良い。その中から好きな曲を選ぶのも賢明でよい。